

機関番号：32689

研究種目：基盤研究(B)

研究期間：2008～2010

課題番号：20320011

研究課題名(和文) 仏教論理学と後期大乘仏教への展開

研究課題名(英文) Buddhist logic and the development of late Mahāyāna Buddhism

研究代表者

岩田 孝 (IWATA TAKASHI)

早稲田大学・文学学術院・教授

研究者番号：80176552

研究成果の概要(和文)：

サハジャヴァジュラ(11世紀)の仏教の哲学綱要書『定説集成』での瑜伽行派の無形相知識論の節についての梵文校訂テキストと和訳注を作成し、この定説の論理的思考方法が法称やシャーンタラクシタなどの見解に遡ることを示した。更に、この教理の分析の基礎として法称の『知識論決択』の主張命題の定義の節を解説した。この文脈では、聖言と世間での承認(*prasiddhi*)は、それらに反対する主張を否定する根拠と見なされる。しかし、聖言等は常に妥当であるわけではない。同書の分析に基づき、聖言と承認がどのような条件の下で妥当となり得るのかを示した。

研究成果の概要(英文)：

With respect to the section of the tenet of the Yogācāras who advocate that cognition has no form in Buddhist Doxography *Sthitisamāsa* written by Sahajavajra (11c.), I created a critical edition of the Sanskrit text and an annotated Japanese translation and indicated that the logical way of thinking of this tenet can be traced back to the views of Dharmakīrti, Śāntarakṣita and so on. Further, as the basis for the analysis of this tenet, I read a section of the definition of thesis in Dharmakīrti's *Pramāṇaviniścaya*. In the frame of this definition, it is true that the words of an authority and acknowledgment (*prasiddhi*) are regarded as a means for negating statements which are contrary to them, but they are not always valid. On the grounds of the analysis of this text I showed the conditions upon which the words of an authority and acknowledgment can be valid.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2009年度	2,400,000	720,000	3,120,000
2010年度	2,200,000	660,000	2,860,000
年度			
年度			
総計	6,200,000	1,860,000	8,060,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・印度哲学・仏教学

キーワード：瑜伽行派無形相知識論 聖言 世間承認

1. 研究開始当初の背景

後期大乘仏教の理論は、顕教と密教からなり、両教を総合的に捉える試みが11世紀の諸学匠によって行われた。顕教の教理を記述

する方法としては、大方の場合、法称(Dharmakīrti 7世紀中葉)の確立した推論がその基盤になっている。本研究では、顕密の総体を解明する一過程として、11世紀のサハジャヴ

アジュラ (Sahajavajra) の宗義書を解説すること、そして、その解説の基盤となる法称の推論説を解析することを計画した。インド後期大乘仏教の顕密両教の定説を論じる書物が多く存在していたことは知られている。しかし、それらの梵文原典はほとんど散逸しており、それらの解説は、チベット語訳を通して行われるのが現状である。難解な教理をチベット訳の構文のみから読み解くことは容易ではない。幸いにも、マールブルク大学のミヒヤエル・ハーン教授との共同研究 (1990年 - 1991年) の際に、サハジャヴァジュラに帰される『定説集成』 (Sthitisamāsa) の梵文写本 (Nepal-German Manuscript Preservation Project, Reel No. 324/4) が残されていることを知った (論書の題名として、これまで西藏訳からの還梵 Sthitisamuccaya を用いたが、写本の各節の末尾に -sthitissamāsa なる語が記されていることから、Sanderson 教授のアドヴァイスを参考にして Sthitisamāsa と改める)。これは、顕教と密教の諸学派の定説を要約した梵文原典であり、散逸を免れた貴重な書物の一つである。これが同書を解説しようと考えた最初の動機である。

後期大乘仏教の理論の基盤となっている法称の仏教論理学の総合的研究は、1960年以降、主にウィーン大学においての法称の著作の翻訳研究という形で行われてきた。筆者もこれに携わり、特に 1990年以降は、法称の最重要文献である『知識論決訳』 (Pramāṇa-viniścaya) (第一章から第三章までの全章) ドイツ語訳を作成するための共同研究をヨーロッパの研究者と行ってきた。法称の仏教論理学の研究を進める中で、1990年から一年半の間、ボン大学に赴任し、ミヒヤエル・ハーン教授 (マールブルク大学) と共に『定説集成』のサンスクリット語写本の transcription を行い、論書の内容を一瞥した。その共同作業を通して、仏教論理学での思考方法がその後の大乘仏教の教理構成の理論的な基盤となっていることを確信した。1998年と 2000年に、同写本の瑜伽行派の教義の部分に関する和訳とその教義内容の解説を『早稲田大学大学院文学研究科紀要』43 (1998), 45 (2000) にて発表した。

『定説集成』の後半部分では密教の定説が論述されている。顕教から密教への展開を理解するためには、この密教部分に対する解説も不可欠であると考え、2007年に密教研究の第一人者であるアレクシス・サンダーソン教授 (オックスフォード大学) と同写本の共同研究のための基礎作業を行った。そして、2008 - 2009年度に早稲田大学で、同大学の杉木恒彦博士を含めて、共同の解説を行う計画を立てた。サンダーソン教授と杉木博士を加えた共同研究 (それぞれ順に研究協力者、研究分担者) により密教の部の教義の一部の理

解が可能となった。

2. 研究の目的

本研究は、11世紀のサハジャヴァジュラが著作した『定説集成』の顕教の教理、特に瑜伽行派の定説の訳注研究を行うこと、そして、その定説の基盤となっている仏教論理学的思考方法を解明することを目的とする。

前者の訳注研究に際しては、『定説集成』の顕密両教の全体像を知るために、密教の定説の部分 (全体のおよそ半分) の解説の基礎作業を行う。『定説集成』の諸定説は偈文のみにて簡潔に記述されている。定説の論述内容を理解するために、サハジャヴァジュラがどのような先行する理論を前提とし、それをどのようにし自らの論述に適用したのかを吟味する。

先行する理論の多くは、法称の仏教論理学的な思考と共通する点を有する。その意味で、『定説集成』の諸定説の理論的な解析には、仏教論理学での推論的な思考からのアプローチが必要となる。即ち、同書には仏教の各学派の定説が主張命題の形で提示されているが、その論拠についての詳しい説明は概して省略されている。従って、それらの命題の成立根拠と想定される部分を補う必要がある。その操作は、彼らが用いた論理的な枠組みに従って行われねばならない。主張命題を他者に明確に伝えるための論理的な枠組みの大方は、法称の論理学において既に論じられている。そこで、こうした仏教論理学的な視点からの分析が可能となるように、基礎論として、法称の論理学書である『知識論決訳』の第三章 (他者のための推論章) の主張命題の規定の部分を解説する。

3. 研究の方法

『定説集成』の研究は未だ初期的な段階にあり、密教部分に至ってはその研究成果の発表は皆無に等しい。そこで、まず、同サンスクリット語写本とそのチベット語訳 (『北京版西藏大蔵経』 No. 3071 所収) に基づき、テキストの校訂の草案を作成し、『定説集成』の解説を行った。

『定説集成』の顕教部については、瑜伽行派の無形相知識論を、有形相知識論と中観派の諸法無自性説との比較という視点から、解説し、訳注を作成した。同書の著者であるサハジャヴァジュラは、顕教の部分では、法称などが用いた理論、例えば、離一多性論証など、を論述の拠り所としている。これら諸理論の典拠となるシャーントラクシタの『中観莊嚴論』などに見られるパラレル資料を検討して訳注に含めた。

『定説集成』の密教部では、8~9世紀頃に成立した『ヘーヴァジュラ・タントラ』 (Hevajratātra) 等に説かれる真理観が論じられてい

る。これらの諸説について詳しい Sanderson 教授を早稲田に招聘し(2008年度3カ月、2009年度1カ月)、筆者が主に顕教の資料を提供し、同教授が密教の資料を提供するという形で、共同研究を進めた。

密教の部分に関しては、同教授の提供した諸資料を読みつつ、梵文写本の転写、チベット語訳との照合、テキストの校訂を行った。それを基に、同教授と杉木博士と共にテキストの解説を行った。顕教の部分については、瑜伽行派と中観派の教理のテキストの校訂を作成し、瑜伽行派の定説の部分を筆者が英訳し、それを同教授と共に推敲した。(2008-2009年度)。その後、共同解説の際に十分論じつくされなかった部分を補う必要が生じた。つまり、サハジャヴァジュラの意図した理論の背景を思想的展開の角度から明らかにするために翻訳した内容を再吟味することが必要となった。そこで、ジターリ、カマラシーラ、シャーンタラクシタ、法称などの諸学匠の教説で、サハジャヴァジュラの定説の前提となり得るものを取り出し、それらの思想的なつながりを考察に加えた。その一部を和訳した(2010年度)。

法称の名著『知識論決択』の解説については、現在、ドイツ語への翻訳のための基礎作業を進めている。オーストリア科学アカデミーと中国の China Tibetology Research Center との交流により、最近発見された同書の写本が閲覧可能となり、その写本を基に、筆者は、第三章のドイツ語訳を担当している。その基礎研究として、主張命題が伝承された聖言と矛盾する場合、主張命題の妥当性はどのように可能となるのか、という問題を論じた部分を考察し、その結果を和文の論文にて発表した(2008年度)。翻訳と訳注については、ウィーンに出張し、オーストリア科学アカデミーの所長のクラッサー博士と共に筆者のドイツ語訳注を推敲した(2009年度)。その後、訳注に補遺を加えたものを、同アカデミーのシュタインケルナー名誉教授に示し、同教授から推敲に関して貴重なアドバイスを受けた。訳注の際に十分論じる紙幅がなかった論題 — 世間で承認されたことには妥当性がどの程度存するのか、矛盾する二つの命題がある場合に、その一方を否定することは如何に可能か、という問題 — について、論文において考察を行った(2010年度)。

4. 研究成果

(1) サハジャヴァジュラは『定説集成』(= SthS)において瑜伽行派の定説を論述するに際して、最初に、唯識説に立脚する無形相知識論 — 外界の対象が実在せず、しかも、知識は自らの中に対象などの形相を有しないという知識論 — を取り上げ、その中で外的対象の存在の否定を論じている(この

部分は、これまでの拙稿において既に解説と分析を行った)。外界の対象は存在しないと言うが、認識論的には、対象の認識の成立に際しては何らかの対象の存在が要請されるであろう。そこで、対象は外界のものではなく知識に顕現する形相であるという説、つまり、知識が形相を有するという説が想定される。本研究では、この有形相知識論に対して、サハジャヴァジュラが、SthSにおいて、どのような理論を用いて批判したのかを考察した。SthS(38b-39ab)によると、その批判は次の矛盾の説示からなる。単一知識が多くの形相を有する場合、知識は自らの本性である単一性を失うという矛盾の説示、及び、知識が形相に相応して多となる場合、知識そのものが成立しないという矛盾の説示である。これによってサハジャヴァジュラは、形相を有する知識、即ち、知識と同一と見なされる形相は、単一性と多性の両方を有することがない、ということ説示している。一般に、或るものが排中の矛盾対立する二つの特性、即ち、単一性と多性、を有しない場合、そのものは存在しない。この論理的包摂関係は、既に法称説に見られ、認識論の領域では一般的に知られたものである。これを有形相なる知識に適用すると、「知識と同一な形相が排中の単一性と多性の両方を欠いている場合、そうした形相は存在しない」という命題が得られる。「知識と同一な形相(形相を有する知識)が単一性と多性とを欠く」という前件は上記の如く成立する。従って、「知識と同一な形相は存在しない」という後件も成立する。つまり、青などの形相は知識としても存在しない、という結論が得られる。SthS(38b)においてサハジャヴァジュラが述べた、青などの対象が知識であることを拒斥する(bādhaka)根拠とは、まさに「単一性と多性を欠くものは存在しない」という論理的包摂関係を主題である有形相知識に適用するという論理である。このことを本研究において示した。因みに、この包摂関係は、シャーンタラクシタの『中観莊嚴論』(=MA)では、中観派の立場から諸法の無自性たることを証明するための根本的論理となっている(see MA 1)。同様に、SthSにおいても、中観派での諸法の無自性たることを証明する論理として用いられている(see SthS 58)。

次に、SthSの解説の考察において、サハジャヴァジュラが批判した有形相知識論が如何なるタイプの有形相知識論であるのかという問題を取り扱った。彼の論述が極めて簡潔なものなので、その論述のみからは確定した結論を得ることは難しい。そこで、先行する諸学匠の知識論にその批判対象となり得る有形相知識論が存するか否かを調べた。その結果、批判の対象と見なされ得る有形相知識論として次の説が可能であることを示し

た。即ち、シャーンタラクシタが MA 及びその自註で批判した有形相知識論の中の最初の説（外的な対象は存在しないが、知識に形相が顕現する、その形相は真実なものである、という有形相知識論）、或いは、シャーンタラクシタによって批判されたシャーキヤブッディの有形相知識論（青や黄のどの多様な対象形相に相応して多様な知識が同時に生じるという意味で、知識は多なるものであるという有形相知識論）、或いはまた、ジターリによって批判された瑜伽行派の三種の有形相知識論の中の最初の説（形相を有する知識は、単一であるが、外的および内的なものとして転変すると、無明により所取と能取として顕現する、という有形相知識論）、これらの有形相知識論がサハジャヴァジュラの批判した有形相知識論になり得ることを示した（これらの結果を拙稿『定説集成』（Sthitisamāsa）和訳研究 無形相知識論瑜伽行派の定説（3）— 知識における形相の存在の否定 —）において発表した）。

以上、サハジャヴァジュラの無形相知識論の認識論の核となる理論の一つが法称やシャーンタラクシタの提唱した無自性論証にまで遡ることが明らかになった。これは、インド大乘仏教の最終的な段階での顕教の教理の由来を文献的に示すという意味で、大乘仏教の思想史的な流れの分析に役立つであろう。

（2）後期大乘仏教の理論の基盤となった法称の論理学の推論には未だ解明されていない部分が残されている。特に、法称の主著である『知識論決択』（Pramāṇaviniścaya = PVin）の第三章（他者の為の推論章）に関しては、最近その写本が発見されたこともあって、校訂テキスト作成、テキストの解説、内容の分析を目的とする研究がオーストリアの科学アカデミーを中心に進められている。それと連携しつつ、筆者は、テキストの解説と分析の役割を担っている。本研究では、解説の最初のステップとして、推論で取り扱われる主張命題を論題とした。推論において証明されるべき事柄とは何かという問題意識のもとに、仏教論理学派が推論での主張命題の規定に際して、信頼に値する人の言葉（聖言）と世間で承認された事柄とをどのように捉えたのかを考察した。

①法称は、推論の主張命題の定義において、証明されるべき主張命題は、認識根拠たる直接知覚や推論によって否定されないものである（anirākṛta）、と定説する。初めから完全に否定されているような命題は、推論を立てて証明すべき対象とはならないので、疑似主張命題であり、こうした命題は主張命題から排除される、と言う。法称は、更に、主張命

題は信頼に値する人の言葉や世間で承認されたことによっても否定されないものである、と定言する。これによると、世間上の承認（prasiddhi）はそれに反する命題を拒斥する根拠となる。つまり、世間で習慣的に認められることは物事の妥当性を確立する根拠であるということになる。しかし、世間で通用する事柄は必ずしも真ではない。本論では、世間上での「承認」なる概念が何故に疑似主張命題を否定する根拠となるのかを論理的に解析した。

言葉とその指示対象が世間で承認されることを基準にして、それと矛盾する事柄を拒斥する、という場合、この「承認」による拒斥とは論理的には「承認」を自性論証因とする推論である、と法称は言う。しかし、世間上での承認は何をどのようにして導くのか、という点について法称は明示していない。

こうした問題に取り組んだのがダルモータラである。彼は、世間上での承認による推論を次の如く構成する。すべてのもの（指示対象）は、話者の意図した言葉によって表現され得る。何故ならば、世間上で承認されているものである故に、という推論である。この推論での大前提は、「世間上で承認されたものは、話者の意図した言葉によって表現され得る」という論理的包摂関係である。本論では、その大前提がどのように論理的に成立するのかを、ダルモータラの注釈に従って考察した。考察では、その証明のポイントは、世間上での「承認」を、世間上で認知されたものたること（prāṭītya）、つまり、分別知（vikalpavijñāna）の対象たることに置き換える点にあることを示した。何故ならば、この分別知の対象たることから、話者の意図した言葉によって表現されることが導かれるからである。

仏教の認識論によると、分別知は外界の実在するものを所縁として生じるのではないので、分別知には、外界の特定な対象とは関係のない対象形相が顕現する。つまり、分別知の対象形相は、特定な言葉との対応が定められた外的対象とは異なり、特定な言葉による制約のない不特定な形相である。従って、分別知に思い浮かぶ任意の対象形相は、話者の意向により任意の言葉と結びつけられる。こうした思考方法に従って、ダルモータラは、「すべて（言葉の指示対象）は、世間上で承認される故に、話者の任意の言葉によって表現され得る」という推論の成立することを詳細に論じている。

このように「話者の意図した言葉によって表現可能であること」という所証特性は、単に否定されないというのみではなく、論証因によって証明されているので、それと矛盾したこと、つまり、世間規約に従った言葉と対象との対応関係を否定すること（指示対象が

意図した言葉で表現されないこと)を拒斥する、と論じるのである。

本論ではこの論述を理論的に分析しつつ、その論証のプロセスを文献的にも検証した(以上の結果を拙稿「他者の為の推論(parārthānumāna)における世間承認(prasiddhi) — 法称の見解とダルモッタラの解釈 —」において発表した)。

②法称は主張命題を、その定義において、直接知覚・推論・聖言・世間承認によって否定されない命題である、と規定する。即ち、直接知覚などの四つの根拠によって否定される命題は、論証因の適用されるべき主張命題ではない、それは疑似主張命題である、と言う。この規定を文字通り理解するならば、仏教論理学派が妥当な認識(pramāṇa)と認める直接知覚と推論のみならず、聖言や世間承認も、疑似主張命題を否定する根拠となる。しかし、聖言や世間承認が無条件に認識根拠となることは、常識的にも認められない、また、認識根拠を直接知覚と推論のみに限定する法称の自説と矛盾する。そこで、この主張命題の規定をより説得力のあるものとするには、聖言や世間承認はそれらと矛盾する命題を如何なる条件のもとでどのように否定し得るのかという点を明確にしなければならない。法称はこうした点を考慮に入れて、聖言などがそれらと矛盾する命題を否定する場合の否定の在り方をより厳密に述べている。この論述は陳那(5世紀後半から6世紀前半)の説には見られない法称独自のものである。

本論では、聖言に関する妥当性に焦点を合わせて考察を行った。なお、法称の主張命題の定義の文脈では、この聖言は、具体的には、主に話者の援用する論書(sāstra)や話者の認容(abhyupagama)からなる。本論の主たる論点は、法称の主張命題の定義の枠組みでは、どのような場合に聖言はそれと矛盾する命題を否定する根拠となるのかを明らかにすることにある。その分析に際しては、法称が否定に関して導入した二つの概念、即ち、拒斥(bādha)と障礙(pratibandha)をキーワードとして用いた。矛盾対立する二つの命題がある場合、一方が他方を一意的に偽なるものとして否定することが拒斥である。それに対して、どちらか一方を偽として否定することなく、両者が互いに他方を排斥することが障礙である。論書(聖言)に対して、それと矛盾対立する命題がある場合、一方から他方への否定の機能が一方的である拒斥が成り立つ場合と、双方向的である障礙の関係が成り立つ場合との相違を基準にして、論書(聖言)による否定の在り方を分析した。更に、この拒斥と障礙とを区別する視点を、より広く、推論との矛盾、自らの認容との矛盾、話

者の自語との矛盾の分析にも適用した。即ち、推論、聖言(具体的には論書または自らの認容)、話者自身の言葉がそれぞれ自らと矛盾した命題に対してどのような否定機能を有するのかを明らかにした。これによって、矛盾対立する命題を論証因の適用領域から除外する場合、即ち、疑似主張命題として処理する場合に、矛盾命題を疑似主張命題とするための根拠は何か、という問いに対して、推論や論書などがそれぞれ固有な条件のもとに妥当な根拠となることをその条件の類別と共に示すことが可能となった。以下はその分析の結果である。

(A) 推論(anumāna) — 推論は、経験的に成立しているすべての主題に関して推論と矛盾したことを述べる命題を拒斥する(bādhaka)要因である。

(B) 論書(sāstra) — 論書が自らと矛盾する命題を否定するか否かについては、命題の主題の在り方に関する三つの分類により、三通りが考えられる。

(B1) 命題の主題が論書に依存して存すると認められる場合、

(B1.1) 論書に規定された主題が経験され得る(dṛśya)主題であると、その主題についての論書の内容は、妥当な認識によって拒斥されない限り、妥当なものとして受容される。従ってこの場合の論書は自らと矛盾する命題を拒斥可能である。

(B1.2) 論書に規定された主題が感性的領域を全く超えた経験できない(adṛśya)主題であると、その経験され得ない主題についての論書の内容は、論書自身の言説にて拒斥されない限り、妥当なものとして受容される。従って、この場合の論書は自らと矛盾する命題を拒斥可能である。即ち、論書に準拠する主題(感性的領域を全く超えた主題)の考察では、論書は妥当なものとしてされるべき(pramāṇāyitavya)である。その論書はそれと矛盾する命題を拒斥する要因である。

論書が妥当であり、それと矛盾する命題を拒斥する場合には、論書は結果論証因による推論に帰属する。

(B2) 命題の主題が論書に依存しなくとも経験的認識によって存すると見なされる場合、しかもその主題に関する命題が論書と矛盾する場合には、論書は対立する矛盾命題を拒斥することはない。この場合にはその論書と矛盾命題とは互いに障礙する(pratibandha)。即ち、論書と矛盾するという理由だけでこの矛盾命題が拒斥されることはない。しかし、考察にてどちらか一方に妥当性が成立すれば、それは他方を拒斥する要因である。

(B3) なお、命題の主題が全く存しない場合には、障礙さえも有り得ない。

(C) 認容(abhyupagama, abhyupāya) — 論書の妥当性とは、それを用いる話者が或る主

題についての論書の記述を妥当であると認容することである。その意味で、論書は話者の認容したことである。従って、認容がそれと矛盾した命題を否定する場合の分類は、基本的に論書の場合と同様である。

認容は論書と同様に常に妥当であるわけではない。前の文で認めたことと後の文とが矛盾する場合、認容との矛盾 (abhyupagama-virodha) が生じる。話者自身の認容との矛盾がある場合、矛盾する両者は、互い他方を排斥する、つまり、障礙する。しかし、一方が他方を一意的に否定することはない、つまり、拒斥することはない。このタイプの障礙のある、認容と矛盾した命題は、主張命題にはならない。

(D) 自語 (svavacana) — 自語は自らの言葉と対立する命題を障礙する。同一の文において自らの言説とその意味とが矛盾する場合、自語との矛盾 (svavacanavirodha) が生じる。この場合、矛盾する両者の一方が他方を拒斥することはない。両者は互いに障礙するのみである。論書との矛盾も、論書を話者の恣意的な認容と見なす視点からは、自語との矛盾と異ならない。つまり、そこでは、矛盾する二つの事柄は互いに他方を障礙するのみである。障礙のある、自語と矛盾した命題は、主張命題にはならない。

(以上の結果を拙稿「矛盾対立する命題の否定は如何に可能か — 聖言や論書などに基づいた否定の論理 —」において発表した。)

後期大乘仏教の教理の記述の基盤となった法称の論理学は、その構成において陳那の推論説を基本に据えている。しかし、その推論の記述に用いる用語、及び、内容については、法称は多く場合に法称の独自な見解を提示している。上述の①②においては、法称が「世間での承認」と「聖言」という陳那にとって自明とされた概念も、論理的な枠組みの中では、新たに規定する必要があると考えていたことを示した。そして、それらの意味内容に関する法称説の解説を通して、常識的な事柄が一体どの程度それらと矛盾する事柄に対して妥当性を有するのか、という問題に対する法称の解答を文献的に解析した。こうした解析は、法称が自明と見なされる諸概念をどのように自らの論理学の体系に組み込み、どのように整合性のある論理系を構成したのかを知るための資料となる。その意味で、これらの基礎的研究の結果は、いま進められている法称の論理学書『知識論決択』第三章の解説に寄与するであろう。なお、本研究において、同章の主張命題の部分の独語訳注の草稿を作成したが、最近、ダルモータラの梵文注釈が発見され、この注釈の解説に基づく解析を大幅に含める必要が生じている。これらを含めて訳注の精度を上げ翻訳を

完成すること、これが次の研究の目標である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計3件)

(1) 岩田 孝 『定説集成』(Sthitisamāsa) 和訳研究 無形相知識論瑜伽行派の定説 (3) — 知識における形相の存在の否定 — 『早稲田大学大学院文学研究科紀要』 vol. 56, 2011, pp. 1-12 (査読有り)

(2) 岩田 孝 「矛盾対立する命題の否定は如何に可能か — 聖言や論書などに基づいた否定の論理 —」 『東洋の思想と宗教』 vol. 27, 2010, 1-45 (査読有り)

(3) 岩田 孝 「他者の為の推論 (parārthānumāna) における世間承認 (prasiddhi) — 法称の見解とダルモータラの解釈 —」 『東洋の思想と宗教』 vol. 26, 2009, pp. 1-33 (査読有り)

6. 研究組織

(1) 研究代表者

岩田 孝 (IWATA TAKASHI)
早稲田大学・文学学術院・教授
研究者番号：80176552

(2) 研究分担者

杉木 恒彦
早稲田大学・国際教養学術院・非常勤講師
研究者番号：40422349

(3) 研究協力者

Alexis Sanderson (オックスフォード大学 All Souls College Oriental Studies)
Helmut Krasser (オーストリア科学アカデミー 南アジア文化精神史研究所 所長)